厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
総括研究報告書

川崎病のサーベイランスとその治療法に関する研究

主任研究者　原田研介　日本大学医学部小児科

厚生省の適応基準（原田スコア）による川崎病の選択的γ-globulin　療法
－10 年間の成績－

A. 研究目的

1989 年に厚生省の川崎病に対するγ-globulin 適応基準（原田スコア）が提唱されてから 10 年間を経過した。この治療成績を明らかにするとともに、スコア使用時の問題点として、スコア使用開始以前に比べて血液検査の頻度が増加していないか、また判定に用いる検査は複数回必要かという点について検討した。

B. 研究方法

1989 ー 1998 年の 10 年間に日本大学板橋病院に入院した急性期川崎病の連続 258 例（不全型 24 例を含む）に対して、原田スコア 7 項目中 4 項目以上を満たす場合にγ-globulin 療法（IVGG）を行った。それらの診療録から入院中および外来での遠隔期における冠動脈病変の合併の有無を調べた。

C. 研究結果

258 例中 203 例(78.7%)に IVGG が行われた。IVGG の適応にならなかった 55 例中、2 例（3.6%）に一過性の冠動脈拡大を認めたが、遠隔期まで残る冠動脈病変は発生しなかった。IVGG を行った 203 例の冠動脈障害発生率は28例(13.8%)で、うち19例(7.4%)が遠隔期まで残存した。入院中の血液検査頻度は、スコア判定実施以前の 3 年間(1986-88 年)では 3.13±0.87 日に一回、対象年度のスコア陽性（IVGG 施行）群では 3.06±0.46 日に一回、スコア陰性（IVGG 非施行）群では　2.81±0.68 日に一回で、やや頻度が増していたが、有意差は認めなかった。冠動脈障害 28 例中、スコアが入院当日に陽性であった例が 13 例で、翌日の検査まで対象にすれば 17 例であり、残る 11 例は 3 日以上の検査によってスコア陽性になった例であった。

D. 考察

原田スコアによる IVGG の適応判定は、陰性者からは遠隔期まで残る冠動脈障害を発生しておらず、満足できる結果を得た。スコア判定のために血液検査回数が増えたとは言えなかった。３回以上の検査を判定に用いることで原著（Harada K: Intravenous γ-globulin treatment in Kawasaki disease. Acta Paediatr Jpn 33: 805-810, 1991）での目標より投与率が増えた反面、合併症予防には良好な結果を得たと考えられる。今後の問題点としては、このスコアを使用して陰性

の場合は、適応判定を繰り返し行うために一般には最短で 9 病日まで入院していなくてはならないこと、検査回数は今後検査室の迅速性が向上するにつれて増える可能性が高いこと、また当初の目標よりも投与率はすでに高く、医療に対する社会的趨勢から、今後も増加していく可能性が高いことが考えられ、現在の状況で医療経済的効果をあげているかどうかについては検討が必要である。

E. 結論

1989 ー 1998 年の 10 年間に日本大学板橋病院に入院した急性期川崎病の連続 258 例（不全型 24 例を含む）に対して、原田スコアによる選択的 IVGG の適応判定は、陰性者からは遠隔期まで残る冠動脈障害を発生しておらず、満足できる結果を得た。目標より投与率が増えた反面、合併症予防には良好な結果を得たと考えられる。

F. 研究発表

1. 論文発表

川崎病急性期の血小板数の解析-第 14 回川崎病全国調査成績から-. 唐澤賢祐、鮎沢　衛、原田研介、中村好一、屋代真弓、柳川　洋　日本小児科学会雑誌　103（1）

2．学会発表

1．川崎病におけるガンマグロブリン必要量の検討.　日本大学医学部小児科　金丸浩、三沢正弘、唐澤賢祐、鮎沢衛、能登信孝、住友直方、岡田知雄、原田研介.　第 101 回日本小児科学会学術集会.　平成 10 年 5 月 15-17 日(米子)

2．川崎病冠動脈障害における Tc-99m tetrofosmin 負荷心筋ＳＰＥＣＴによる心筋血流増加率の有用性.　日本大学医学部小児科　唐澤賢祐、谷口和夫、金丸浩、三沢正弘、鮎沢衛、能登信孝、住友直方、岡田知雄、原田研介.　第 34 回日本小児循環器学会総会・学術集会.　平成 10 年 7 月 22-24 日(東京)

3.経胸壁ドプラ心エコーによる冠予備能の測定－ドプラガイドワイヤーとの比較-.　日本大学医学部小児科　能登信孝、唐澤賢祐、鮎沢衛、住友直方、岡田知雄、原田研介. 第 18 回日本川崎病研究会.　平成 10 年 10 月 30-31 日(神戸)

4. 川崎病冠動脈閉塞のＳＰＥＣＴ所見に関する検討. 日本大学医学部小児科　唐澤賢祐、鮎沢衛、能登信孝、住友直方、岡田知雄、原田研介. 第 18 回日本川崎病研究会.　平成 10 年 10 月 30-31 日(神戸)

５.ＲＤＡ（representational difference analysis）法により急性期に特異性を示した Interleukin－4 関連物質の変動.　日本大学医学部小児科　鮎沢衛、原田研介　Childrens Hospital Los Angeles; Chieko Kuroda, Julius Peters, Masato Takahashi. 第 18 回日本川崎病研究会.　平成 10 年 10 月 30-31 日(神戸)

Ｇ．知的所有権の取得状況

なし